

ユネスコ学会で御神渡りと 諏訪の取り組みを報告

福村さんの学会発表概要

諏訪湖の御神渡り（御渡り）をテーマに気候変動と文化継承について研究している筑波大学大学院生の福村佳美さん(51)は茨城県が、昨年12月に国連教育科学文化機関（ユネスコ）の関連組織がアイルランドで開いた学会に登壇し、約2年前から諏訪地方で取り組んできた研究の成果を発表した。近年、御神渡りが出現しない「明けの海」が増える中、諏訪地域の冬の伝統文化を次世代にどう継承するのか。福村さんは「討論型世論調査」を利用した、世代間の対話による御神渡りの価値の共有の有効性を説いた。研究は松下幸之助記念志財団の助成を受けた。ユネスコ学会での発表の概要を長野日報に寄せた。

◇ ◇ ◇

気候変動が文化継承にとって脅威であることに気づくことで、気候変動対策が自分ごととなるプロセスを研究しています。気候変動が風土を変えるならば、日本文化はどのような影響を受けるのでしょうか。伝統を継承するためにも人々の気候変動影響

の認識を文化の側面から考察する研究が急務であると考えます。

本研究では、長野県のほぼ真ん中にある諏訪湖の御神渡りを事例としました。諏訪湖では、近年の暖冬により結氷のない冬「明けの海」が続いています。そこで、気温上昇が御神渡りに与える影響を「昔の冬を知る高齢世代」と「現在の気候の中で育った若者世代」の視点からどのように評価するのかについて、さらに高齢世代と若者世代がそれぞれ次の世代へ御神渡り文化の継承にどのような気候変動対策を検討するかについて、討論型世論調査の手法を用いて明らかにしました。

研究のポイントは高齢世代と若者世代が①異なる世代と気候変動について対話するとき、どのような気づきを得るのか②同世代と気候変動について対話するとき、どのような対策を検討するのかということですが。討論型世論調査とは、無作為に抽出した市民がコミュニティの代表として、共通の課題について専門家からの情報提供を受け、少人数で討論をした後、その課題



アイルランドで開かれた学会で発表する福村佳美さん（本人提供）